

エコエコアザラク

眼

Night 12

魔女の鉄槌

第二稿

脚本／小中千昭

Teleplay by Chiaki J. Konaka

2003\12\26

登場人物

黒井 ミサ(18)

田上 寛

山中 博美

賀茂 康夫……………都市デザイナー

岸田 雄彦……………与党幹事長秘書

伊澤 亮子

リンダ

リリー

少女時代の亮子

修験僧達

若い研究員 1

2

3

4

5

○前話続き／街路

既に絶命しているリンダを抱くミサ——。
ミサを見つめる暴徒の疑惑と憎悪の入り交じった眼。

○前話続き／街頭テレビ画面

博 美「バジリスク症候群の最初の保菌者が判明しました。その人物の名は——」

画面に映し出される、黒井ミサの写真。

○前話続き／街路

ミ サ「(アサメイを構え)許せない！」

○前話続き／KJ探偵社

田 上「黒井ミサが、東京を滅ぼす……」

○テレビ画面

博 美「その人物の名前は、黒井ミサ。全てのバジリスクは彼女から始まったのです。当局はこの人物の捜索を開始しており、市民の皆様からの情報を求めています」

○街頭

街頭テレビに映し出されているミサの顔。暴徒たちの囁き合う声が輻輳する。

声 「ミサ——黒井ミサ——ミサ——」

まだ涙が枯れない瞳は黒い情念の炎に満ち——

ミ サ「——みんな——、呪われてしまえ!!」

アサメイを天に頂き、口の中で呪言を呟くミサ。
怯む顔無き暴徒達。

囁き声「呪い——魔女——魔女だ——」

ミサの躰周囲がぼうっと明るくなる。
後退っていく群衆。

ミサ「逃げるな。地獄の業火に焼かれてくるがいい！」

アサメイを振り下ろすミサ。

悲鳴を上げ逃げていく群衆。悲鳴の中に、異質な子どもの様な金切り声が聞こえた。

だが——、何もおきない。

ミサ「!?」

ドサツ。地面に落ちる、焼け焦げたビケ——。

ミサ「(慄然) ビケちゃん……」

と——、鉛色の空が蠢く。

ミサは見上げる。ミサを見下ろす巨大な眼を。

ミサ「——どうしてあたしを見つめ続けるの!? どうしてあた

しは人を呪う事が出来ないの!?!」

眼は、答えない。

○赤い部屋

ソファにリリー。スツールに亮子。

亮子の脇のモニタには、ウェブ・ブラウザが開いており、画像掲示板が開いている。リンダの死体写真

と、そしてテレビからキャプチャしたらしいミサの

顔写真（「魔女・黒井ミサ」のタイトル）。

と——、何かを察知したか亮子、顔を上げる。

ややして入ってくるミュキ。

ミュキ「——おはよう、ママ」

亮子「——おはよう、ミュキさん」

ミュキ、ソファに座る。

と、リリーが自分をじっと見つめている事に気づき

ミュキ「——何よ」

リリー「……」

リリーも、亮子も黙している。しかし、ミュキが何を
をしたかは認識している。

ミュキ「——（ポツリと）あたし、ここ辞めるわ」
亮子「——そう……。どうするの？　これから」

ミュキ「（立ち上がり）もっと、楽しいところ、行くわ」
出て行くミュキ。

亮子「——（ミュキの選択を察し）さよなら……」

○テレビ画面

画面に映し出されているミサの顔写真。

博美「（オフ）——で、この黒井ミサという人物は、昭和40年代から、東京で時折人々の噂の中で、魔女として登場しており、同一人物かどうかは不明ですが、非常に特異な人物である事は間違いない様です——」

○埠頭

独り立つ田上。波寄せる壁人には、安い花束が置かれて
いる。

田上「——（呟き）あんた、言ったよな……。自分がいなくなったら、探してくれて……。探すも何も、死んじまったらおしまいじゃねえか……」

田上は、『眼球譚』を抱えている。

田上「——黒井ミサ……。あんな子が、この東京を滅ぼす——」
と！　田上の視界が一瞬歪む。

田上「なっ……」
眼をこすり、こらすと——、レインボー・ブリッジの手前に巨大なる門の幻影が浮かんでいる。

田上「——なんだよあれは……」
再度激しく眼をこする田上。
門は視界から消え去っていた。
暗然と立ち尽くす田上——。

無意識に額に指を這わせ——、前髪を無理に下ろして隠す——。

田上「——何で、俺まで——」

▼前話フラッシュ／公園

ミサと直接接触した時の事――

田 上「俺が出来る事は……、人を捜す事だけだ」

○赤い部屋

じっと座っているリリー。虚空一点を見つめ続けている――。

○ビル屋上

揃えて置かれている赤いヒール。

○駐車場

ビル下の日陰になった駐車場。
安らかな顔で死んでいるミュキ。

○赤い部屋

リリーの、包帯に覆われた、額――。
と、リリーの肩にそっと触れる手。
リリー、見上げる。
哀しげな顔でリリーを見つめている、亮子――。

○街

顔を伏せ気味に、雑踏の中を歩くミサ。
徐々に雑踏の音、くぐもっていく。
はあ、はあ、はあ――。
ミサの吐息だけになっていき――
風景も彩度が落ちて、ノスタルジックな空気へと変化していく。
ミサ、立ち止まる。

ミサの視界の中で、街はリアリティを失おうとして
いる――。

○埠頭近く

そのヴィジョンを共有していた田上――。

田上「くそっ！」

瞼をかきむしる様にこする田上。

田上「――何を見せてやがる！」

▼田上POV／揺らぐミサの視点の中で、印象的な街頭テレビを含む風景が浮かぶ。テレビには博美が映っているが、はっきりとは見えない。

田上「――渋谷か……（場所適宜）」

○街

顔を上げ、眼を閉じ、突っ立つミサ。

雑踏は怪訝そうに避けていく。

と――、ミサの指を引く子どもの手。

ミサ「――（気づき）」

――ここから過去時制――

見上げているのは、少女時代の亮子（9話登場）。

少女の亮子「魔女のお姉ちゃん、また会えたね」

ミサ「え……」

少女の亮子「あのね、お姉ちゃんが教えてくれた呪文、効いたの」

ミサ「呪文……」

少女の亮子「パパとママ、大怪我して病院に入院しちゃった」

ミサの眼は哀しみに覆われていく。

ミサ「――魔術が、効いたんだ……」

少女の亮子「ねえ、あたし魔女になる。なれるよね？」

ミサ、空を見上げる。

ミサ「（泣き笑い）どうしてよ…… どうしてこの子の呪いは効

いたのよ」 あたしはこの子程の力もないというの」
鉛色の空には巨大なる眼。だが雑踏にはそれは見え
ていない。

怪訝そうにミサの顔を見つめている少女の亮子――

○赤い部屋

リリーに抱かれる様に、ソファに凭れている亮子。

亮子「――（囁き）ミサ、お姉ちゃん……」

○イメエジ

夜の住宅街の路地に、ポツンと独り立つ少女の亮子。

少女の亮子「エコオ、エコオ、アザラーク――

エコオ、エコオ、ザメラーク――

その声――、徐々にミサのものへ。

ミサ「エコオ、エコオ、ケルノノース――

エコオ、エコオ、アラディーヤ――」

そこに立っている、シルエットのミサ。

ミサ「（モノ）思い出した……」

私は魔女――。闇の力を行使する者――。私は長い時を
魔女として過ごしてきた――。

けれど、この呪いに既にして満ちている世界に、魔術の
力でこれ以上人を傷つける事に何の意味があるうかと。

そして私は――、肉体を棄てていた……」

少女の亮子の声「お姉ちゃん、地獄の門が開くよ……」

○街

ハツとなるミサ。

そこは既にノーマルな世界であり、少女の亮子もい
ない。

ミサ「――地獄の、門……?」

肉体を棄てていた私が――、（そっと胸に手をやり）こ

の四方田千砂の躰を復活させた……。何の為に……。憐れみの為に……？」

と、周囲の雑踏、ミサを取り囲み始める。

ミサ背後の巨大街頭テレビに映し出されているミサの顔写真。

それとそこに立つミサが見比べられている。

声 「魔女——ミサ——黒井ミサ——」

しかしミサは動じない。

ミサ「——魔女は古（いにしえ）より、排斥され続けてきたのよ……！」

ミサ、取り囲む群衆を睥睨。

ざわつとなり、後退する群衆。

ミサ、ニツと笑った。

○テレビ画面／賀茂設計事務所オフィス

博 美「今、東京では伝染性と思われる奇病の流行で騒がしいですが、その一方ではこの東京を未来に向け輝かしい都市に生まれ変わらせようと尽力されている方がいます。今日は、東京リバース計画の責任者で都市デザイナーの賀茂康夫さんにお話を伺います。今日はよろしくお願いいたします」

賀 茂「（頷く）」

博 美「東京は、いずれ大地震が来るのではないかと警戒されている訳ですけど、東京湾岸に、ええとサウス・ゲートシティですか？ この様な超高層都市を建設されるといふのはどういう意味なのでしょう」

賀 茂「（柔和に）ご指摘の通りね、東京に再び地震災害があるというのは不可避です。無かったらいいな、では済まない。だとしたら、如何に被害を軽重にくい止めるかこそ我々都市をデザインする側は考える訳ですね」

博 美「といいますと、このサウス・ゲート・シティは来る地震の防波堤の様なものですか」

賀 茂「というより、避雷針ですね。逆の避雷針。この南大門、

てまあ、僕らは呼んでるんですが、地上と同じ暗い地下にまで構造体を埋め込んでいまして、それが海側の震源からの波を集散的に受けて空中に分散させるのです」

博美「南大門、何か昔の平安京などを思い出させますね」

賀茂「（苦笑）いやまあ……」

ここから、博美と賀茂は画面上はそれまでと同じ様なインタヴューを続けるが、違う言葉、違う感情が音声となって重なる。

博美「——どうして、あたしは除外されているんですか」

賀茂「そうだね、君は誰よりも強い眼の力を持っている」

博美「そんな——眼であたしを、見ないで下さい……」

賀茂「（やや笑み）どうしたね？ 躰が熱っぽくなっている」

博美「（やや苦しげ）あなたが——、黒幕——、あたしを——」

賀茂「瞳だけではない——。君の唇の内側も、極めて美しい色をしている」

『あッ』、と声なき声を上げ、気を失う博美。

ブラック・アウト——

○イメエジ

アスファルトに砂で描かれたペンタグラム。

○祈禱室

ちりーん——。幾つもの鐘が一斉に鳴る。

博美「！」

修験僧姿の十数人の男達が、暗い地下室で篝火を囲み、祈禱している。

博美のやや前では、賀茂と岸田雄彦がビジネス・ライクな会話をしている。内容は聞こえない。

博美「——」

打合せが済んだのか、岸田雄彦は賀茂に一礼し、博美の脇へ来て耳打ち。

岸田父「——息子が寂しがっていますよ……」

博美「……」

岸田父、去っていく。

賀茂、修験僧の一人を呼び、博美の方に向く。

賀茂「では、行きましょう」

博美「え……」

○エレベータ内

果てし無く地下へ下っていくエレベーター。

無言で乗っている三人。

○長いトンネル（共同溝）

人が一人歩ける程の狭い円型のトンネル。

そこを禹歩の術で歩いていく修験僧、賀茂。普通に
ゆっくりと歩く博美。

賀茂「（オフ）ここからは、気をつけて」

博美「（オフ）え……」

賀茂「（オフ）容易に心を覗かれぬ様……」

そのトンネルは、やがて巨大な空洞に出る。

○ヘイズ・ピット

どおおおんんんん——

広大なる円筒型の縦孔。

その最深部近くの横階層に、トンネルは通じていた。
愕然と歩み出てくる博美——。

見回しながら、奈落を手すり越しに覗き込む。

賀茂「バジリスク——、見る事で人を呪い殺す伝説の巨大なる
蛇——。君達の持つ力は、ここから君たちへ伝わった」博

美「え……」

奈落には、4、5人の若者が私語を発しながら、コ
ンピュータで何かを計測している。その計測の対象

賀茂「——（愛とおしそうに）我が、愛するバジリスク——」覗き込んでいた博美の顔に、淡い光が照らす。うっとりとした顔で光を顔に浴びる博美。

○同／奈落

計測されている者からの視点で、若者達（国立大・賀茂ゼミの学生）が動き回る様を眺めている。

※以下の会話、間断無く、クロストークで

研究員1「シータ波、基準値変動無し」

研究員2「あれ？ この微振動何」

研究員3「上の坊さん達、暴れてんじゃねーの？（笑）」

研究員4「今度飯買いに行くの誰」

研究員5「あたしじゃない」

研究員3「（構わず）俺、大盛りつゆだく」

研究員5「牛井なんかヤダよ」

研究員2「（視点の主を覗き込む）ハロー。イエー」

まるくHipHopのPV。

研究員3「あとお新香もな」

研究員5「やだっつってんでしょ。ピザとろうよ、ってカロリー

高過ぎじゃんお前って」

視点の主の吐息なのか——。

巨大な獣の息声。しかし彼らには聞こえていない。

○アスファルトの砂丘（場所適宜）

ミサは赤い砂で大きなペンタグラムを描いている。最後の線が結ばれた時、ミサは魔女の目となって中央に立ち、アサメイを胸に両手で抱く。

ミサ「——ヘイ・カース、ヘイ・カース——、エステイ・ビ・

ベロイ——」

ゴオッ——風がミサの髪をなびかせる。

闇の力がミサに降りる。

ミサ「(モノ) 我に真実の敵を伝えよ——」

▼フラッシュ／少女の亮子の顔

少女の亮子「地獄の門が開くよ……」

ミサ「！」

そこは湾岸とは遠い筈であるのに、ビルの向こう側に巨大なる尖塔の門が蜃気楼の如き姿で浮かぶ。

ミサ「地獄の門——、それを開く者——、悪意でこの街を見つめ続けた者——」

ズズズズズズズズ——

地獄門の幻影、ごく、極く僅かにでもミサの方に迫ってきているかの様——。

そこからやや離れたところに駆け込んでくる田上。

ミサが行っている事を見て愕然。

田上「——黒井ミサ——、本当に、この街を呪い殺すつもりなのかよ!?!」

○ヘイズ・ピット／浮遊する者の視点

くぐもったミサの声「悪意で我を見つめ続けた者よ！」

その声に反応し、視点はヘイズ・ピットの奈落へ彷徨い出す。だが、その姿は研究員の若者達には見えていない。

研究員1「シート波基準値——より高いな……。ヤマジい？」

研究員2「振幅値も上がってるかもしれない」

研究員4「誤差だよ誤差の範疇。それよかマジで腹減ってんだけ

ど俺

研究員3「やっぱ俺ヒレカツサンド喰いてー」

研究員5「自分で買ってこいつの。知るか」

視点、遙か頭上へ連なる天井を見上げる。

○祈禱所

チリーン——、チリーン——
修験僧達が囲む円陣の中に、虚脱した顔で立っている博美——。

博美「——黒井、ミサ……」
僧達の鳴らす鐘がランダムに乱れだし、頭が割れそうな音がコンクリートの室内に充満する。
その音の高まりにつれ、博美の眼に激しい憎悪による邪悪な輝きが満ちていく。
グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
獣の如き絶叫を上げる博美。

○アスファルトの砂丘

ミサ「三」
ミサのペンタグラムを囲む様に、地面より黒い影がむくむくと起き出してくる。

田上「——なんだあれは……」

影は人の形となって、ヨロヨロとミサの方に迫ってくる。

ミサ「——使い魔——、式神……」
ミサ、アサメイを逆手に持ち、眼前に構える。
死者達の呻きの如き不気味な声。
ペンタグラムの結界から入ってこれない式神達。
だが——、

○祈禱所

ゴオオオオオオオオオ！ 僧達の法力を一身に受け、トランスにある巫女・博美——。
全身に気を漲らせ、憎悪を剥き出しに吠える。
博美の目の周囲には痣が浮かび——、額にはうっす

らと亀裂が。

○アスファルトの砂丘

ミサ「二」

赤い砂のペンタグラムが消え始めている。

同時に、式神達が結界を破り侵入！

田 上「あっ！——（激しい逡巡／助けるべきか否か——）」

ミサは明らかにうろたえている。

迫る式神達を防御する術は既に彼女にはない。

激しい風がミサを襲う。

ヒュッ！ ヒュッ！

カマイタチがミサの頬を、ミサの髪の一束を切り裂いていく。

ミサ「——あたしは——、もう魔女じゃないの……？ これ程までにあたしの魔術は弱くなっているなんて——」

博美の声「そう！ もうお前よりあたしの方が強い二」

ミサ「ii!？」

影達はひとところに集まり、その黒い塊の中より産み出される博美の姿（思念体）。

ミサ「（呆然）どうして、そこまでの力——」

博美「バジリスクがあたしを選んだのよ！（哄笑）」

手を差しのばす博美の思念体。

博美「あたしにはお前が許せなかった！ 全てが判った気になつて！ 人を見下して！」

ミサの首が見えない力で締めつけられていく。

ミサ「くううっ……」

博美「あたしがどんな思いでこれまで生きてきたか！ あんたなんかには死ぬまで判らない！ だから——だから殺してあげる二」

田 上「——（モノ）あいつは呪いをかけているのか違うのか二」

田上とミサ、ゆっくりと並んで歩く。

田上「あんたが——、その、この街を呪っているって言い残して死んだ奴——、騙されてたんだろうか……」

ミサ「……」

田上「(チラとミサの横顔を見て)——そう思いたい、だけ、なのかな——、俺が……」

ミサ「(やや怪訝そうに)——え……」

田上「(調子変え)でその、地獄の門て奴、もしサウス・ゲート・シテイの事だったら、完成は未だ二年先だ。

焦ることも無いんじゃないか」

ミサ「(被りを振り)時間がもうないの……。悪しきバジリスクの力が強くなっている……」

田上「あんたは——、どうするんだ……」

ミサ「——」

田上「(苦笑)その、魔術、で……、東京を護ってくれるってのかな？」

ミサ「あたしが、護る……？ 魔術で……？ (哀しそうな目になり)——どうしてあたしが——、大体あたしにはもうそんな力は無いのに……」

黙る二人——。

田上「——気負うなよ……。東京の人間があんたにお願いしてる訳じゃない……。こんな汚れたクズ共の街、地震で一回消えちまえばいいと思ってたさ、俺は」

ミサ「——」

田上「俺は——、今——、あんたの助けになってやりたいけど——(自嘲)、俺はさっき、何しようとしたんだ。

あんな化物、一本背負いでもしようとしてたんかよ」

ミサ、田上を見つめる。

田上、視線を反らす。

田上「——柔道だけは、強かったんだ俺は……。警官としちゃ最低だったけどな……」

ミサ「助けて、くれるの……？」

田上「え……？」

ミサ「あたしを助ける、力になってくれるの……？」

田 上「……」

○ヘイズ・ピット

激しくぶれる映像。

轟音。光。研究員達の怒号と悲鳴――。

異変が起きている。

以下次回